社会的笑いの発達：笑いの攻撃性の観点から

B3H001　　伊藤　理絵

主査：西園マーハ文　　副査：久保ゆかり，廣澤満之，佐久間路子

問題と目的

笑いは愉悦の感情の表れであり（Darwin, 1872; Ekman & Friesen, 1975）、笑いに対しては、少なくとも二つの立場が考えられる。一つは、養育者をはじめとする周囲の人々と親密な関係を築くものとして、笑いを肯定的に捉え、ポジティブな側面を強調する立場、もう一方は、笑いは時に攻撃的に機能するものであり、笑われた相手が心理的な苦痛を生じる場合があるとして、笑いのネガティブな側面に重きを置く立場である。これまでの笑いに対する議論は、笑いをポジティブなものとして価値付けるか否かという一方向だけで笑いを見つめ、その性質を語ってきたきらいがある。特に、子どもの社会的発達における嘲りの役割は、これまで笑いの理論を提唱してきた者たちですら焦点を当ててこなかった問題である（Billig, 2005/2011）。笑いを真に理解するということは、その対象が子どもの笑いであっても、笑いのもつポジティブな顔とネガティブな顔をもった笑い、その双方から理解する必要があると思われる。

本研究の目的は、人に向けた笑い（社会的笑いおよび社会的微笑）の発達を攻撃性の観点から検討することで、子どもの笑い、ひいては人間の笑いを親和性と攻撃性の両面から捉える意義について考察することである。

本論文の構成

本論文の構成は、以下の通りである（Figure1）。

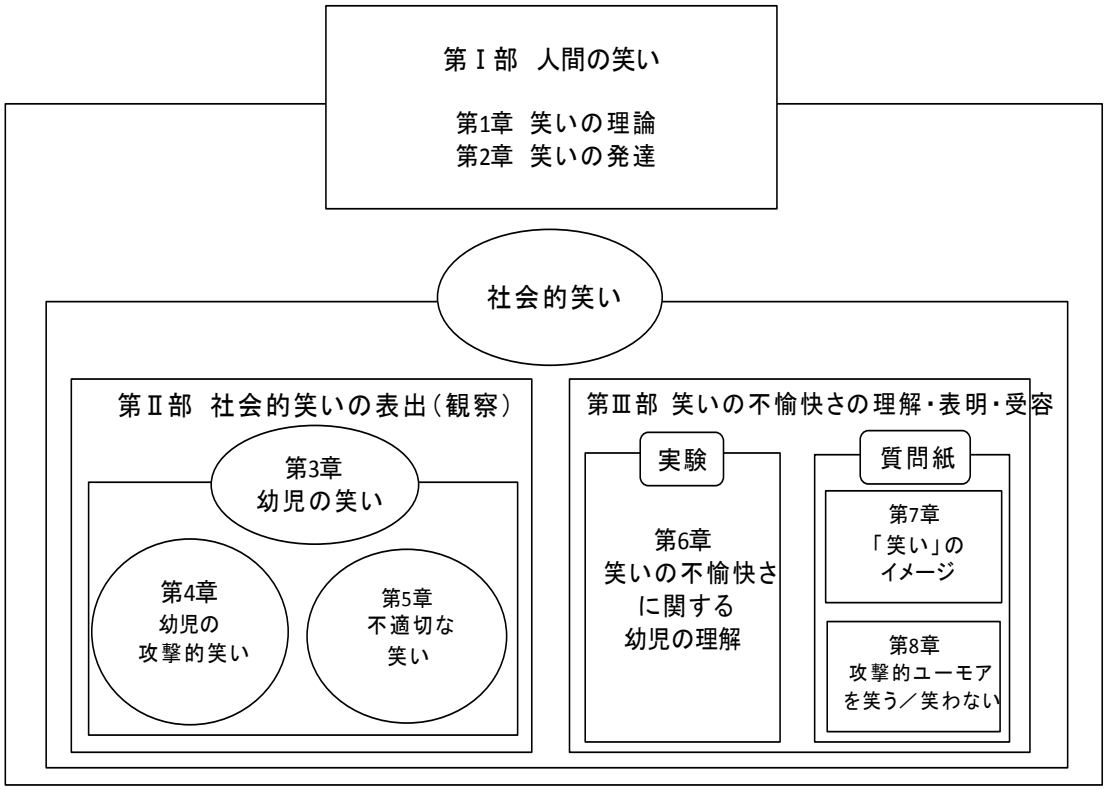

Figure1　本論文の構成

第Ⅰ部　笑いとは何か

第１章　笑いの理論：笑いはどのように語られてきたか

これまで語られてきた人間の笑いに関する理論の概略を述べる。特に、笑いの攻撃性は優越感情理論の中で語られてきたが、その他の理論（不適合理論，覚醒理論，放出理論）からも笑いの攻撃性について考えた。近年では、笑いやユーモアについて、脳神経科学や生理学の領域での研究もなされるようになってきており、コミュニケーションとしての笑い（社会的な笑い）を考える際には、学際的なアプローチと、親和／攻撃および愉快／不安のような笑いの相反する二つの性質を包含した議論が必要であることを述べた。

第２章　子ども期における笑いの発達

子ども期の笑いの発達について乳幼児期を中心にこれまでの研究をまとめた。乳児期の笑いは、親和的笑いとして発達するが、幼児期になると笑いを介したや

り取りが常に心地良いものではないことに気付くようになる。この気付きが笑いには親和性だけでなく攻撃性もあることを知る土台となると考えた。幼児の笑いの発達について観察した友定（1993）によると、幼児期初期において親しい大人とのやり取りを通して自分自身が承認され、認められる体験を重ねた子どもは、やがて、子ども同士での交流ができるようになっていくが、次第に「嘲笑」のような攻撃を意図した笑いも見せるようになり、5 歳児（年長児）の終わり頃になると「笑ってはいけない」と、自ら笑いをコントロールする場面が見られることから、幼児期は、笑いのもつ親和性と攻撃性という相反する二つの性質に気づく最初の発達段階にあることを述べた。また、人に向けた笑いが表出される背景には、大きく分けて「生物学的要因」「社会文化的要因」「認知・感情発達的要因」という 3 つの要因が互いに影響を受けて発達することで、他者に対する親和的笑いだけでなく、他者を拒絶したり排除したりするための攻撃的笑いの表出に至ることを仮定し、社会的笑いの構成要素のイメージ図を示した（Figure2）。

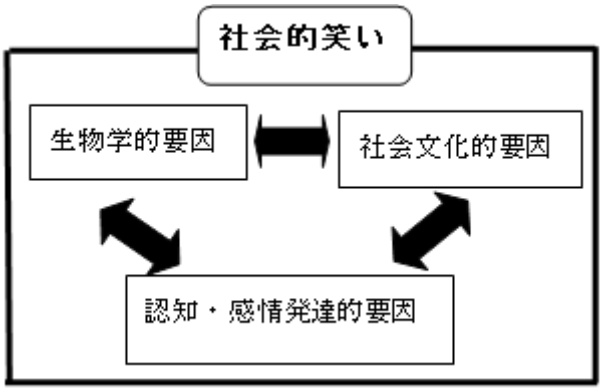

Figure2 社会的笑いの構成要素（イメージ）

第Ⅱ部 幼児期における笑いの攻撃性

幼児が表出する社会的笑いについて、５つの観察研究を取り上げた。

第３章　幼児期に見られる笑い

幼児期に見られる社会的笑いの実態について観察した結果を示した（観察 1～2）。幼児が表出する笑いを「笑い反応」とし、笑い反応が起こる要因として、笑いが生じるための「刺激要素」と他者との「関係性」から幼児に見られる笑い全般を明らかにした。「関係性」は、「親和的・受容的関係」「非親和的・非受容的関係」「孤立的関係」の３つに分類でき、「刺激要素」は「感覚・運動刺激」「言語・認知刺激」「感覚運動・言語認知刺激」の３つに分類された。そのうち、幼児が見せる笑いは､他者との親和的･受容的関係の下での笑いが９割以上を占めており、特に、言語・認知刺激に対して笑いを示していたことから、幼児は、笑うことで

他者とのコミュニケーションにおいて、親しみを表すことが多いことが明らかになった。また、一日に見せる笑いが多い幼児と少ない幼児の笑いを比較した結果、幼児は、一日に表出する笑いの頻度にかかわらず、他者との親和的・受容的関係の下で笑うことが多かった。

第４章　幼児期に見られる攻撃的笑い

幼児の攻撃行動に伴う笑い（攻撃的笑い）について考察した（観察 3～4）。幼児の笑いのほとんどは親和的な笑いである。しかし、少ないながらも攻撃行動に伴う笑いが見られ、幼児が攻撃的笑いを表出する際は、無視等の関係性攻撃に伴って笑いを示すことが多かった。また、仲間とともに攻撃的笑いを表出する場面では、攻撃的笑いを共有する仲間同士にとっては親和的な笑いであるが、笑いの対象となった相手にとっては攻撃的な笑いであるという、一つの笑いが二重の意味をもっていた。幼児の攻撃的笑いは、頻度としては多く見られる現象ではないが、頻度の点でも表出形態の点でも“見えにくい”性質をもっており、この“見えにくさ”こそが幼児の笑いを両面（親和性・攻撃性）から捉える重要性を示していることを述べた。

第５章　大人に受け入れられない幼児の笑い

保育の一斉活動場面という、集団生活の中で大人による規制が比較的強いと思われる集団活動場面を取り上げ、その中で幼児が見せた大人に受け入れられない笑いについて考察した（観察 5）。大人は子どもの「おかしい」言動を認めもするが、同様におかしいとはどういうことなのかを示しもする（Billig, 2005/2011）。親は子どもへのしつけの手段として、嘲笑や懲罰的なユーモアを用いることで大人のルールの世界が教えることがあるが（Dunn, 1988; Billig, 2005/2011）、保育という集団生活でルールや規律に反する行動をする子どもに対し、親とは異なる立場にある大人はどのようにかかわるのかを検討した。笑いは常に相手にとって親和的に機能するわけではなく、適切に表出しなければ、相手に不愉快に思われたり、攻撃として受け取られたりすることがある。自分の笑いが受容されない経験は、相手に対する親和的な笑いであっても、適切に表出しなければ伝わらないことがあることの気付きにつながるのではないかと考え、笑いの規範性という観点から、大人が幼児の笑いを伴う行動を受容しなかったときに、幼児がどのような反応を見せるのかを分析した結果、大人の介入後に見られた全事例のうち約 6 割が、幼児の笑いが消失する事例であった。保育士等の大人は状況に応じて守るべき行動の基準を変えており、幼児の笑いを伴う行動を不適切であると判断した大人は、笑いの不適切さではなく、笑いが付随する行動の不適切さに焦点を当て、

婉曲的に指摘する可能性が示唆された。

第Ⅲ部　笑いの不愉快さを語る

幼児を対象に実施した実験と、幼児期以降、笑いが常に自他にとって良い影響をもたらすわけではないことという経験を積み重ねてきた大学生を対象に行った質問紙調査の結果をまとめた。

第６章　幼児は笑いの不愉快さを説明できるのか

笑われる不愉快さを幼児は理解しているのか、また、どのように説明するのかを実験によって検討した。笑いの理解課題として、主人公が自分の失敗を他児に笑われ泣いてしまうというストーリーの紙芝居を作成した。また、感情理解課題、心の理論課題および言語能力との関連も調べた。その結果、失敗を笑われた後の結果を予測することと、失敗を笑われて泣いた結果について、笑われたことによってネガティブな表情になる／なったと説明することは、生活年齢および感情理解と関連しており、正の相関関係にあった。また、生活年齢と語彙年齢を統制すると、心の理論は、笑われて泣くという場面を見る前に「笑われたから、うれしい顔はしない」という結果の予測と関連があり、感情理解は、笑われて泣いた場面を見た後に「笑われたから嫌な気持ちになって泣いた」という結果を説明することと関連がみられた。

第７章　笑いの不愉快さの経験と「笑い」のイメージ

幼児期以降、笑いが常に自他にとって良い影響をもたらすわけではないことを経験する機会が増えると思われるが、そのような不快な笑いの経験を意識しているのかどうか、子ども期よりも言語による報告が可能な大学生を対象に調査した。まず、「笑い」という言葉から思い浮かべるイメージをカテゴリー化した。「嘲笑，バカにする，バカにされている」、「冷笑」、「悪巧み」、「皮肉」のように他者に与える不愉快さをイメージさせる言葉も挙げられていたはいたものの、「笑い」から思い浮かべる言葉については、「楽しい」「幸福」などのポジティブな語が上位になっていた。

そこで、次に、笑いに含まれる攻撃性を認識している者でも、「笑い」に対し肯定的なイメージを抱くのかを検討するため、笑いの不愉快さの経験の有無を尋ね、そのことが「笑い」に対するイメージに影響を与えているのか検討した。その結果、男性の 55.42%、女性の 59.00%、全体では 57.38%が不快な笑いの経験をしていた。不快な笑いの経験をした時期として、思春期にあたる中学生から高校生の時期に不愉快な笑いの経験をしたと答える割合が、5 割以上を占めていた。また、不快な笑いのエピソードとして、実際に自分が笑われて悲しい思いや恥ずか

しい思いをした経験や、他者に対する笑いを見て共感できなかった経験、笑った意図が相手に伝わらなかったために誤解されて不快に思った経験だけでなく、笑いを攻撃の手段として用いているのを見て不快に思った者やいじめと感じる笑いのエピソードを記述されていた。しかし、不快な笑いの経験の有無にかかわらず、「笑い」から思い浮かぶ言葉として、ネガティブな言葉を挙げた割合は１割未満であった。“楽しさ”“幸せ”“おもしろい”“明るい”“笑顔”などが多く挙げる傾向にあったことから、不快な笑いの経験を自覚しているか否かにかかわらず、「笑い」に対するポジティブなイメージが示された。さらに、不快な笑いの経験が「ある」と答える者は、不快な笑いの経験が「ない」と答える者よりも「コミュニケーション」や「会話」を挙げる者が多く、不快な笑いを経験していることを自覚しているからこそ、コミュニケーションにおける笑いを重要視していることが示唆された。

第８章　不愉快な笑いは不愉快か：笑いの攻撃性のポジティブな働き

大学生を対象に、社会風刺のような攻撃的ユーモア刺激を笑ったり、おもしろいと思ったりすることについて質問紙調査を行った。笑いの攻撃性はネガティブな側面だけでなく、ポジティブな側面がある。たとえば、人間は「社会風刺」という形で、笑いの攻撃性を巧みに利用し、権力に対する反逆を笑いやユーモアという形で創造することができる。それは、不愉快さを「不愉快だ」とそのまま主張するのではなく、笑いやユーモアに変えて主張するということだが、社会風刺を創造し、創造された社会風刺を笑うということは、単純に笑い手の攻撃性の高さを示していると言っていいのだろうか。攻撃的ユーモア刺激には、対象となった者や攻撃的ユーモア刺激に直面した者が、その攻撃性に対する嫌悪感や不快感を引き起こすことだけを意図とした攻撃だけではなく、悪意感情を超えたところに存在する、理想と現実、正論と矛盾、葛藤を統合する手段としての働きもある。表面上のルールと支配者たちを嘲笑することは、社会行為者を拘束するルールを破ることで喜びを得ることができ、笑いによって社会の規範に反逆することができる（Billig, 2005/2011）。

このような反逆性と創造性は、従来の指摘のように、笑いとユーモアのポジティブな側面であると言える。笑いを親和性と攻撃性から考えることは、親和性を笑いのポジティブな性質、攻撃性をネガティブな性質と捉えることではなく、笑いの攻撃性もまた、ポジティブな機能とネガティブな機能として働くことを考察する上で、多くの者が「おもしろくない」「笑えない」とする社会風刺を笑う者の特徴について分析した。その結果、攻撃的ユーモア刺激を「おもしろい」「笑える」とするユーモア高評価群は、ユーモア低評価群よりもコミュニケーションにおい

て笑いを必要だと思う傾向がみられた。従来、攻撃的笑いや攻撃的ユーモアは、主に優越感情理論で解釈されてきたが、ユーモア経験に至るための攻撃的ユーモアには、不適合理論における感覚的不適合と論理的不適合とともに、日常生活のコミュニケーションにおいて笑いを重視していることも関連していることが示唆されたことは、笑いの攻撃性をポジティブに捉えることと、日常的な笑いに対する態度に何らかの関連があることが示された。

第９章　結論：笑いの攻撃性がもたらすもの

本論文の総括と成果をまとめた上で、やはり笑いには人に深い傷を負わせる側面があるという点を指摘し、今後の課題を述べた。Figure3 に、本研究の成果を図示する。

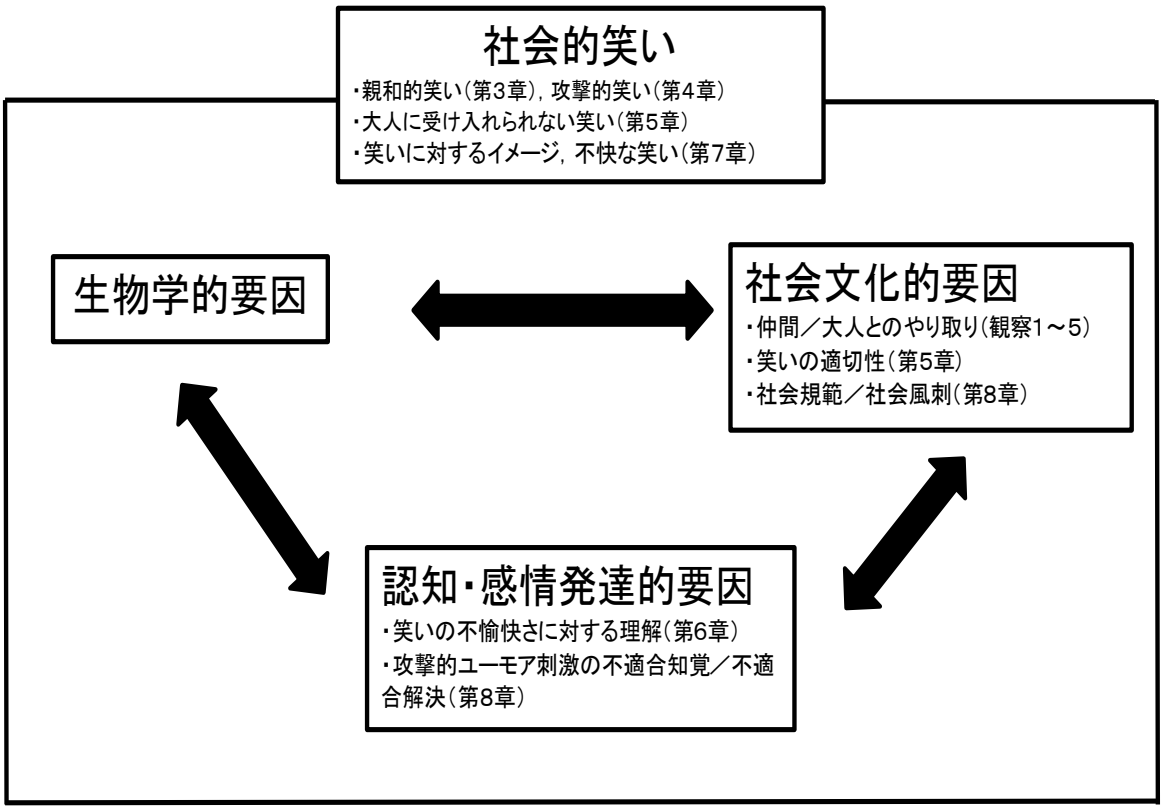

Figure3　本研究の成果

本研究によって、幼児期において笑いのネガティブな側面を説明できる子どもがいること、幼児であっても攻撃的笑いを表出することがあるという結果が得られたことにより、幼児期において嘲笑の芽生えなるものが現れていることが明らかにされた。本論文がこれまで光が当てられることが少なかった社会的笑いのネガティブな側面や嘲笑の発達について論じ、幼児期から研究することの意義を示したことは、今後の笑いの発達研究の発展に大きく寄与する研究であると言える。

笑いは不愉快な笑いの経験があったと報告する者にとっても、ポジティブに捉えられる傾向があるがために、笑いが生じた文脈を考慮せずに、周囲から良好な仲間関係の中で展開されている“遊び”であるとポジティブに解釈されてしまうこともあり得る。近年、人から笑われることへの恐れ（the fear being laughed at）として「笑われ恐怖症（gelotophobia）」に関する研究が、特に海外で多くなされている。笑いに対する感受性や表出性の個人差についても、今後検討してく必要がある。

周囲の大人が、子どもの笑いについてポジティブな側面からのみ捉えようとすると、子どもが笑いに対して感じる不愉快さを理解できないことがある。社会的笑いの発達を攻撃性の観点から明らかにすることは、子どもの言動を適切に解釈する視点にもなると思われる。